

イベントを通じて地域住民が交流

帯広市 市民活動プラザ六中ソフト事業推進室

札内川のほとりに 1960 年（昭和 35 年）に開校、2011 年（平成 23 年）に廃校になった帯広第六中学校は、形を変え、障がい者や地域住民の笑顔や歓声が絶えない複合型施設へと生まれ変わった。

施設の名は「市民活動プラザ六中（以下六中）」。2012 年（平成 24 年）4 月、障がいのある人の働く場を提供する事業所や地元のサークルなどが入居、地域に暮らす人々や子供などにも開放して障がい者と地域住民のコミュニケーションの拠点として開設された。

管理・運営は市民活動プラザ六中管理運営コンソーシアム。入居している十勝障がい者支援センター、ワークサポートふれあい、とかち共同作業所、多機能型事業所あいとうなど複数の民間 NPO 法人や一般社団法人によって組織されている。帯広交響楽団、帯広吹奏楽研究会、短歌結社「辛夷社」などのサークルも六中を活動拠点にしており、14 団体以上が活動している。

入居している団体や地域住民の代表によって構成され、広く地域住民に活用してもらうためにイベントを企画・運営しているのが市民活動プラザ六中ソフト事業推進室（以下ソフト事業推進室）だ。

「障がい者と地域住民が交流する場所としても全国的に珍しいですが、行政管理でも指定管理者による運営でもなく、入居している方たちや地域住民だけで管理・運営するというのも、新しいスタイルです」

と六中について語るのはソフト事業推進室の室長補佐である清水玲子さん。



廃校となった帯広第六中学校が市民活動プラザ六中としてオープン

清水さんは、帯広市出身で維住玲子の名前で小説やエッセーなどの作家として活躍、7年間、アメリカでフリーライターとして活動後は、帯広に戻り、現在は地元ラジオのパーソナリティーも務めている。清水さんは施設の準備段階から携わっており、無作為に選んだ地元の 60 才以上の人がいる家庭 1000 戸を、清水さんら 6 人の調査メンバーが、1 年かけて 1 戸、1 戸訪問してアンケート調査を行った。障がい者が入居する施設となることはすでに決まっていたが、住民がどのような施設を望んでいるかを調べるためだ。「中学校の跡地に障がい者の施設を作るのかと偏見の目で見ると人がいたり、ときには怒鳴られることもあったり、大変な作業でしたが、この調査をきっかけに住民の方とも仲良くなれました」と振り返る。

アンケートの有効回答700人弱から分析した結果、「いつ行っても自由に入ることができ、自分たちの居場所になるようなところがほしい」という回答が多く集まり現在の形になった。

ソフト事業推進室のメンバーは、清水さんを含め、25歳から63歳までの10人。ランチミーティングを月1回行うほか、清水さんが館内を回りメンバーとコミュニケーションを図るようにしている。

■ 年間イベントはどれも大好評

六中では入居している事業所に、障がい者が朝8時半から午後4時ごろまで働いている。主な仕事は帯広市の有料のゴミ袋を10枚ずつ積み、袋詰めにしていく作業。このほか、年賀状やお悔やみなどワープロを使って行う印刷作業や、ろうそく、マグネット、オリジナルシールなどの小物を作る作業も行っている。小物は、イベントや食堂の売店でも売られデザインのかわいらしさから大人気だ。

また、調理室や木工作业教室などの特別教室もあり、これらは一般開放されている。利用料を支払って事前に予約すれば借りることができるため、地元のサークルに利用されたり、帯広市社会福祉協議会と連携して取り組んでいる障がい者の余暇支援活動の調理実習に使われたりしている。館内全てを使ったウォーキングコースも一般開放され、足もとの悪くなる冬場には地域住民で賑わうという。

その他、近隣の障がい者施設や帯広刑務所で収穫された野菜の販売も行われており、とれたての新鮮野菜はすぐに売り切れしてしまうほど好評だ。

ソフト事業推進室が主体となって行う

大きなイベントは年間を通して決まっており、4月は周年記念事業として、コンサートを開いたり、記念品を渡したりするなど、オープンから1年目、5年目、10年目となる節目に行われる。

8月に開催される「六中七夕 ローソクもらい」は、地域の子供たちがローソクもらいの歌をうたい、館内の事業所やボランティア団体のところへ行き、お菓子をもらうイベント。お菓子は入居団体が用意するだけでなく、お菓子メーカーの本社宛てに手紙や電話で寄付をお願いするなど、清水さんらメンバーが奔走し、お菓子を集めた。こうした努力の甲斐あって、毎年、200人以上の子供たちが集まる人気企画となった。

10月は同施設で最も人が集まる「市民活動プラザ六中祭」。ジャズライブやダンスの発表、フリーマーケットなどが行われる。六中祭の時期は、市内各所でさまざまな催しものが開催される時期にも関わらず、毎年、多くの地域住民が参加している。

2015年の10月4日に開催された第4回の六中祭も館内中が人々であふれるほど盛況で、この日は600人が訪れたという。

どの会場も賑わっていたが、特に高齢者の「やったー」という歓声や拍手でひと際、響いていたのは、「八の日ジャンプの会」という同好会が行っているボールを使ったゲーム大会。同会は六中を拠点として、毎月、8の日に行われる、やわらかいボールを使ったストレッチなどをして、体づくりを励んでおり、このほか、リングプルや割り箸などを回収しごみ減量を図るなどのエコ活動も行っている。

同会の会長である国枝道夫さんは「大きな声を出したり、笑ったりすることで元気になれますし、仲良くなって友人ができた人も多いです。足が悪かった方が一人で杖をついて買い物に行けるようになってご家族の方に『ありがとう』と感謝されました。高齢者の居場所として地域に定着していますね」と語る。

12月に行われる「六中ドネーションシップ」は、寄付を目的としたイベントで、クリスマスに物をもらうのではなくプレゼントすることで、豊かな気持ちになろうというのがコンセプト。

これまで東日本大震災があった陸前高田市市立図書館や、横浜市にある、神奈川県立こども病院に治療を受けるため全国から来院している子供たちの家族が滞在するファミリーハウスに寄付している。



六中祭で行われた「八の日ジャンプの会」の様子。「すごいねー」など歓声が飛び、

■ イベントを支える

ボランティアサポーター

また、通年事業として六中キッチンプロジェクトを実施。これは5つのボランティア団体が定期的に食堂を開き、一食 300円という格安ランチを提供するプロジェクト。「六中祭」の際にもカレーライス

150食が完売となるほど好評で、空いている席がないほど混み合っていた。食堂のほかにカフェも地域住民がボランティアで運営している。

2014年から実施している六中地域マイスター講座は1月に1～2回、本気で勉強することを目的に企画、無料で受講することができることもあってこれも好評で1講座 30人から多い時で50人が受講にくるといふ。

これまで講師を招いて救命救急、交通安全、特殊詐欺などをテーマに開き、中でも葬祭ディレクターが講師を務めたエンディングノートの作成方法を学ぶ講座が一番人気だった。皆勤賞を設け、休まなかった受講者には、賞品を渡している。

このほか、認知症予防のための軽運動や、座ってできるやさしい太極拳、前述した八の日ジャンプの会によるストレッチなどは住民からの自主的な声で発足した同好会によるものだ。これらは100円で誰でも参加できる。

今後は、「GOTTCO（ごっこ）プロジェクト」を実施したいという。「これはお店屋さんごっこなどの“ごっこ”をとって名づけたプロジェクトで、1カ月に1回、キッチンプロジェクトを開催してボランティアではなく、本気で楽しんでもらおうと企画しました。そのためにコックコートなどを身につけてレストランのように本格的に料理を作ってもらいます」と清水さん。次から次へ企画が生まれる清水さんのポリシーは何なのか？「私の持論は過去のデータを分析したり、ほかでやっているイベントを参考にしたりせず、地域の匂いや地域の人たちの感触をつかんで、独自でやりたいことをすること。そして苦労だとか

辛いだと思わず、まず自分が楽しまない、うましくないと思っています」

これらのイベントの運営にはボランティアサポーターの協力が欠かせないという。サポーターは登録料として年間 500 円（ボランティア保険を含む）を払ってボランティアをする。マイスター講座を行うようになってからサポーターが増え、正規登録は現在、118 人だ。

ボランティア事業として、2015 年はお薬カレンダーを作成した。カレンダーは寄付のあった布とビニールで作り、錠剤やお薬手帳も入れることができる。そのカレンダーを 1 枚、700 円で 12 月のドネーションシップで販売し、それを寄付する。六中の企画は作って、販売し、それで得た利益を寄付するという良い循環をもたらしている。



六中祭で賑わう食堂。カレーライス150食が完売になるほど盛況だった

様々な人々の支えや誰もが楽しめる企画を次々に打ち出してきたことによって、障がい者はもちろん地域住民にとってもなくてはならない存在となっている六中。「この先、イベントを通して目指すところは？」と清水さんに聞くと、こんな答えが返ってきた。

「設立したときからの目標は地域に力を

つけてもらうこと。イベントを実際に運営しているのはボランティアサポーターや地域の方々。だから主役はこの皆さんだと思っています。もともとこの地域は独居老人が多く外出する機会も少なかった。4年目で同好会は自主的に活動を始めて、高齢者の方たちの居場所になっていますし、六中祭のあの賑わいは地域が力をつけてきた証拠。六中はしっかりと花になったなと感じています。皆さんには生き生きと地域で好きなことをしてほしい」

歩いて通える、居場所がある。そして友だちがいる。清水さんたちが思い描いていたそんな理想の形が、着実に実を結んでいる。

■ 連絡先

〒080-0811
帯広市東 11 条南9丁目1番地

市民活動プラザ六中ソフト事業推進室
代表 室長 鈴木 康悦（すすき こうえつ）
室長補佐 清水 玲子（しみず れいこ）

TEL 0155-24-7598
Email : plaza6cyu@yahoo.co.jp
URL : <http://plazarokucyu.web.fc2.com/>